



日本記者クラブ昼食会

日米パートナーシップ

ジェラルド・フォード米国大統領

1974年11月20日 帝国ホテル「富士の間」

p2

もう一つの「ユニオン」
日米相互依存の時代

p3

同盟関係と東アジアの安定

p4

国内問題は世界の問題
繁栄なしに平和はない

p5

真の相互依存の精神を
天皇陛下の訪米を

© 日本記者クラブ

ご列席の皆さま、在任中に日本を訪れた最初の米国大統領として私は、この前例のない機会にあたり皆さまにごあいさつするとともに、私をお招きくださった日本記者クラブと、日本国民に直接話しかける機会を与えてくださった日本のラジオ・テレビ放送関係者の方々と、まず感謝の意を表明したい。

私は、日本のすぐれたニュース・メディアによる私の訪問のすばらしい報道ぶりについて深く感銘している。私はこれまで、常に米国のジャーナリストたちと仕事の上で良好な関係を持続してきたものと思っているが、日本のジャーナリストの皆さまに対しても、同じような気持ちをお願いしている。私は、すべてのジャーナリストを　そして他のすべての人々をも　私が遇されたいと考えるのと同じように遇することを目標としてきた。

私は、米国国民の心からのあいさつをお伝えするものである。と同時に、米国議会の両党指導者からも、よろしく伝えてほしいと言われてきた。米国の民主・共和両政党の指導者たちは、すべての米国民が日本とのパートナーシップをいかに重視しているかを皆さまに伝えてほしい、と私に要請している。

もう一つの「ユニオン」
大統領がユニオン(合衆国)の現状について議会に対し毎年報告を行うことが、米国ではならわしとなっている。同じ精神のもとに日本国民は、もうひとつのユニオン　友好関係に対する日米両国民の相互的な願望の結合　についても、米国民から見た現状報告がなされれば、これを歓迎されるのではないかと私は思う。

私の故郷のミシガン州グランド・ラピッズでは、いま日本の会社が楽器の組立てをしている。そこにおいては、楽器の生み出すメロディーが調

和的であるばかりでなく、日本の人々が築いた労使関係も、従業員と企業とのあいだの調和のモデルとなっている。

その近くの町、エドモアでは、またべつの日本の会社が小型電気モーターを製造している。この日本企業も、われわれの産業社会に新たなエネルギーと善意を注入している。同じような例は、米国のいたるところで見られる。われわれはそれを歓迎している。

米国民が、貴国の社会に米国の貢献したことについてのみ語ったのは、遠い過去のことである。今日、交通は両方向に流れている。われわれはどちらも、互いに相手から学びつつある。

米国が日本とのパートナーシップをいかに重視しているかを示すために、私は最初の海外旅行先として日本を選んだ。私はまた、大統領に就任した最初の日に貴国の駐米大使と会談した。私は、長い間、日本の文化の豊かさや多様性、貴国の産業製品、貴国民の創意、創造性、エネルギー、障害の多い世界のなかにあって富源としての価値をもつ貴国民の勇気を称賛してきた。

ただひとつ残念なのは、皆さまの親切なお招きにもかかわらず、妻がこの訪問に同行できなかったことである。私たちは、後日、妻ともどもこられるよう望んでいる。

米国民は、日米両国が戦後かくも緊密に協力してきたことを誇りにしている。両国のあいだには多少、意見の相違もあったが、両国は一貫して友好関係にあり、パートナーである。

日米相互依存の時代
両国は協力を重ね、ともに繁栄できるような環境を生み出し、貿易・旅行面の関係を拡大した。

米国が日本と経済・政治・戦略の各部門で相互に依存していることは、明白な事実である。米国は、日本にとって最大の得意先兼供給者であり、日本は、米国にとって海外における最大の貿易相手国である。また、日本は、米国の農産物にとって外国における最良の得意先である。われわれ両国間の貿易総額は、1970年以来倍増し、1974年には200億ドルを超える見込みである。米国の対日投資額は世界最大であるが、日本の対米投資も急増し、日本の海外投資総額の5分の1を占めている。

米国を訪問する日本人の数は、1966年の5万人から1974年には70万人余へと増加したが、これも両面通行で、昨年中には35万人余の米国人が日本を訪れている。これは、日本を訪れる外国人の半数近くに当たる。

両国の協力は、第二次世界大戦の遺物を除去した。沖縄返還は、両国間の懸案のなかから戦争の最後の名残を取り除くものであった。両国は、ソビエト連邦ならびに中華人民共和国との関係を改善するために、独自の、しかも相互に抵触しない努力を払ってきた。両国は率直な話し合いのためのよりよい経路を生み出した。お互いが相手を自分の思いどおりの存在であるとみなすことがいかに危険であるか、ということをお互いによくわきまえている。この点をよく皆さまに知っていただきたい。

両国は、互いに相手と話し合う際、何を現代の中心的な必要とみなしているかを、互いに相手にたずねなければならない。

同盟関係と東アジアの安定

もちろん第一は平和である。日米両国民は平和の価値を知っており、物事をこわすためにはなく、築き上げるためにこそ、資源とわれわれ自身の努力とを傾注したいと希望している。わ

れわれは子弟をふたたび戦場へ送るようなことはしたくない。

日米両国の同盟関係は平和の確保に役立ってきたし、今後とも引き続き役立ちうるものである。この同盟関係は、他のいずれの国をも対象としたものではなく、他の国々とわれわれとのあいだの関係改善を妨げるものではない。

日米両国の同盟関係は、両国が完全に同一の態度やスタイルをとる、ということの意味するものではない。東アジアの安定を維持し、援助を必要とする他の国々の開発に助力し、世界の諸問題を軍事的にではなく、外交的・政治的に解決することに協力していこうという決意を、両国がともに明確にいただいていることを意味するものである。

両国の同盟関係は、友好関係と協力が国益にかなうと考える両国民によって築きあげられたものである。私は、両国の関係が、今後とも強固で実質のあるものとして保ちつづけられると確信しており、また、そうすべく努力することを誓うものである。

しかし、平和がわれわれの唯一の関心事ではありえない。われわれは、市民の生活に影響を及ぼすさまざまな国際的な脅威や危険が存在することを知っている。われわれは、原材料や食糧の供給が漸減している現実、およびきわめて複雑な国際経済問題に直面している。

われわれは、従来よりも厳しく節約していかなければならない。われわれは冷い戦争に伴う諸問題の解決には成功を収めたが、これはひとえにわれわれの協力の賜物である。現在われわれは、新しい、よりいっそう複雑な諸問題に直面している。

1854年に、日本の改革家、佐久間象山は、

1974年を見抜いたものと思われるような卓見を明らかにして、次のようにいっている。

「私は20歳にして、人間は一地域の中で結ばれていることを知った」

「私は30歳にして、人間は一国の中で結ばれていることを知った」

「私は40歳にして、人間は5つの大陸からなるひとつの世界の中で結ばれていることを知った」

国内問題は世界の問題

120年後の今日、国家間のきずなは、かつてないほど緊密になり、近代テクノロジーは世界をひとつにしている。個人あるいは一国の成否が、他のすべてに影響を与える。

米国人の中には、米国内に未解決の問題があるときに、なぜ私が日本訪問の招待を受諾したのか、といぶかるものもいる。

そのような米国人に、私は、多くの国内問題は単に米国の問題ではなく、世界全体の問題なのである、と答えた。他国と同様、われわれはインフレを抱えている。他国と同様、われわれは景気後退に直面している。他国と同様、われわれは物価上昇と燃料・原材料の潜在的不足に対処しなければならない。米国はこれらの問題を単独で解決することはできない。各国とも、協力することによってのみ、これらの問題を解決できる。

われわれは、今日の平和を維持するために協力しているように、明日の問題を解決するためにも協力できるのである。

われわれ両国は、国際協力の成果のモデルを世界に示しているが、同時に、新たな困難に対処するうえでもモデルとなることができる。日米

両国は、偉大なテクノロジーと人的資源、また偉大なエネルギーと想像力を備えている。われわれはともに、開発途上諸国への責任を認めており、不可欠な天然資源を、秩序あるかたちで、平和的に分かち合っていくことを考えている。

われわれは、協力して世界的な経済問題に取り組むことができる。私は、われわれが単なる一時的な同盟国ではない、と信じている。われわれは恒久的な友好国である。

われわれは、同じ目標 平和、発展、安定そして繁栄 を共有している。これらは、立派で重要な目標であるというばかりでなく、共通の目標なのである。

繁栄なしに平和はない

平和と経済の福祉という問題は、不可分に結びついている。われわれは、平和は繁栄なしには存在しえず、繁栄もまた平和なしには存在しえず、また世界の大国がその達成を目指して協力しなければ、どちらも存在しえない、と考えている。このことは、われわれ自身に対して、またお互いに対して、さらには日米両国民すべてに対して、われわれが負っている責務なのである。

日本と米国には、共通の国民的なスポーツとして野球がある。野球の試合は2つのチームが争うものであり、相手がいなければ試合はできない。また、双方が相手チームを尊敬し、ゲームのルールを尊重しなければ試合にならない。

私は、われわれが生活している世界について私の考えを述べてきたが、ここで米国民について少し話してみたいと思う。

米国民は、その歴史を通じて、幾度か困難な時期に直面した。彼らは、これからも困難に直面

することを知っている。彼らの負担は、国内においても海外においてもきわめて大きい。米国を観察している人たち　米国人も含めて
の中には、米国民が自信も、責任感も、創造性も失ってしまった、と指摘する人がいる。だが、それは真実ではない。

この1年間に米国の多くの地域を旅行したが、そのたびにいつも私はすがすがしい気分です。ワシントンに帰っている。わが国の国民は果敢で現実的であり、また積極的である。彼らは、全国の無数の町や市で自分たちの問題を解決しつつある。彼らは、歴史が米国の双肩に課している大きな責任を一貫して理解している。米国民は、彼らがこれまで常に示してきたのと同じ力と決意をもって、彼らの本分をつくす用意と意志を備えている。

真の相互依存の精神を

米国民はまた、いかに強力な国家といえども自国だけで歴史の進路を左右することは望めないということも知っている。しかし、基本的な諸問題を理解するとともに、われわれの国益を明確化し、共通の目的を達成するために他の国々と提携する能力があれば、発生する出来事に影響を及ぼすことが可能である。そして米国民は、建設的な目的のため、真の相互依存精神のもとにそうすることを決意している。

このような精神のもとに、私はきょう、皆さまに誓いたい。われわれが将来の諸問題に直面するとき、米国は、これまでと同様、われわれのコミットメントを忠実に守り、確固としてわれわれの共通の目標を追求するであろう。

われわれは信頼できる同盟国であるばかりでなく、頼むにたる貿易パートナーでありつづけるつもりである。われわれは今後とも、貴国が必要とする商品の供給者となるであろう。もし

不足が起これば、われわれの伝統的な貿易パートナーの必要を特別に考慮するつもりである。われわれの友人たちの市場や資源を求めて、これらの人々と競争するつもりはない。われわれはこの人々と協力することを望んでいる。われわれの外交政策の基本的理念は依然として不変である。それらの理念は、確固たる超党派の・国民的支持を得ている。米国民は依然として強く、自信に満ち、忠実である。われわれは時としてぐらつくかもしれないが、失敗はしない。

最後に、個人的な考えを申し述べてみたい。

私は、日本を訪れた最初の現職の米国大統領であることを光栄とし、また大きな喜びとするものである。私は、日本の古都、京都を訪れることを楽しみにしている。日本は急速な近代化にもかかわらず、その文化的主体性を保ってきた。私はすべての変化が必ずしもよいとは思わない。われわれは、現代のもろもろの課題や圧力に過去の永続的な価値を適用するよう努めねばならない。米国民は、日本国民の方々と同様、20世紀の最後の25年間に入ろうとしている現在においてさえ、伝統を尊重することを日本から学ぶことができる。

天皇陛下の訪米を

私はまた、もうひとつの大きな榮譽を期待している。きのう天皇陛下をご訪問申しあげたさい、私は陛下の米国ご訪問を改めて要請した。天皇陛下をワシントンにお迎えし、米国のこれまでの偉大な英雄たちの記念塔の背景をなしている優美な日本の桜、その他米国の国家的な聖地や秘宝を陛下にお見せする最初の米国大統領となることは、この上ない喜びである。

私の日本訪問を手始めに、将来多くの米国大統領が日本を訪問するよう私は希望している。

また、われわれ両国が、そのすべての市民と全人類の生活に影響を及ぼす多くの共通の問題解決に協力、対処していく際、両国の指導者たちが、両国民のこれまで示した手本にならって、相互の国を頻繁に自由に訪れ合うようになることを私は希望する。

私は、大統領として初めて議会で行った演説の中で、私の行政府がコミュニケーション、融和、妥協、協力に基づいている、と述べたが、こうした理念は、米国の対日政策に関しても私の考え方を導いている。日米両国ともなすべき仕事が多々ある。これを協力して遂行しようではないか。また、平和を追求しつづけようではないか。戦争へ向かって一歩踏み出すよりも、むしろ私は、平和を求めて千マイルでも歩く覚悟である。

ご清聴ありがとうございます。

文責・編集部